

平成 29 年度 利用者懇談会

於：東寺方図書館

日 時：平成 29 年 12 月 2 日（土） 午後 5 時 15 分から午後 6 時 15 分まで

場 所：東寺方図書館閲覧コーナー

出席者：利用者：7 人

図書館職員：7 人

図書館長、図書館本館整備担当課長、企画運営担当主査、
東寺方図書館長、東寺方図書館嘱託職員、企画運営係担当（2 名）

内容（要旨）

1. 図書館長挨拶と職員紹介
2. 図書館の利用実態について
3. 議題（資料の汚破損問題と貸出冊数制限について）

図書館： 多摩市の貸出、予約は、全国の同人口規模の自治体と比べても常にトップクラスの利用がある。このように利用が多い中で近年図書館は資料の汚損、破損に悩んでいる。返却カウンターで職員が資料の状態を一冊一冊確認しているが、弁償をお願いするようなケースもある。うっかりお茶をこぼすなどの例も見受けられる。多摩市では貸出冊数の制限を設けていないが、管理しやすい適正な貸出冊数を決めた方が利用しやすいのではという考え方がある。多摩地域 26 市の中で制限を設けていない市も他に 3 市あるが、多くの市は冊数制限を設けている。また、多摩市では若年層の利用者登録が少ないが、これは、貸出冊数制限がないので、子どもの利用者登録をしなくても、保護者のカードで何冊でも借りることができることが原因ではないかという見方もできる。今回の懇談会では、（１）資料の汚損・破損について、（２）貸出し冊数の制限について、ご意見を伺いたい。

（１） 資料の汚破損問題について

利用者： 汚損や破損はよく見つける。絵本にいたずら書きがあったり、セロテープで補強されていたりしているなど。見つけたら図書館職員に伝えるようにしている。

利用者： 返却されるたびに確認する作業は、大変だろう。借りる側が、借りる際に本の状態を把握するということが当たり前になればよいと思う。そのことを図書館から発信するのは、難しいだろうか。民間のレンタル店では、借りる側が状態を納得して借りていると思う。

利用者： もし、自分が汚したとしたら自己申告すると思う。

利用者： 以前、借りた図録が切り取られていて、自分が必要としている部分がなかったことがある。一人ひとりの心がけが汚破損を防ぐ。そういうことを言葉で伝えられるとよいと思う。「期限までにお返しください」と同じようにやんわりと声かけができないか。

利用者： 貸出が無制限だからたくさん借りて、読まない資料はすぐ返せばよいという、資料に対しての軽い気持ちが生まれるのではないか。それが汚損、破損につながっているかはわからないが、本を書いた人の気持ちを大切に本をきちんと扱いたい。

利用者： 図書館に一冊しか蔵書のない本や、絶版の本が汚されたり、紛失したらどうするのか心配になる。

(2) 貸出冊数の制限について

利用者： 家族が都内にいて小さな規模の図書室を利用しているが、一人が借りられる冊数が少ないので、子どももカードを作って利用している。冊数に制限があれば子どももカードを作るかもしれない。

利用者： 貸出冊数に制限があった頃、子どもが小さかったのだが、借りる本を一生懸命丁寧に選んで、きちんと返すということを伝えられたと思う。子どもへの本の与え方という点では、制限があったことは親としてたいへん良かった。

利用者： 子どもの本は、親が選ぶ場合、子どもが選ぶ場合、いろいろパターンがある。子ども自身が一生懸命自分自身で本を選びたいときは、制限があることも良いかもしれないが、赤ちゃんの時期は保護者が選ぶことになる。その場合は、冊数制限がないほうが良いと思う。

利用者： 貸出冊数制限がなくなったときは、正直なところとてもうれしかった。

利用者： うれしくて大量に借りていた時期もあったが、一度にたくさん借りると期限が切れてしまうので、読める範囲にするのがよいと判断するようになった。読み聞かせをしているので、個人でも制限がなく借りられるのはありがたい。

利用者： 調べものをするときは、関連資料がたくさん必要なので、制限がないと助かる。

利用者： 「原則 10 冊」というようなあいまいな規則にしたほうが良いと思う。利用する側として思う存分借りられるという気持ちを持てるのはありがたいが、借りるのは結局 5、6 冊程度で 10 冊の幅があれば十分だと思う。調べものなどで 10 冊以上の本が必要とき、申し出をすれば原則を超えての対応が可能ということではいいのではないか。「いくらでも借りられる」という気持ちがあると、選び方が雑になる。たくさん借りて必要がないものはすぐ返せばいいという、本に対しての軽い気持ちが生まれる。

利用者： 図書館には時が経った本があるのがありがたい。ただ、制限がないことで一人が一分野の資料を独占してよいのかという懸念はある。図書館にしかない希少な本が、一人の利用者に独占されるのは困る。

利用者： 貸出冊数を無制限にしたのは、市民の意見があったのか。

図書館： 当時は予約冊数の制限がなく、取置期限が 2 週間だったため、予約資料が回転せず、長期にお待たせするという状況があった。貸出冊数の制限を取り払ったのは、本の回転を良くすることが一つの理由だった。同じ理由で取り置き期間も 1 週間に変えた。

利用者： 雑誌が制限なく借りられるということもありがたい。生き生きと老後を暮らしていくことができるのは、図書館が身近にあり、自由に借りられるということが関係していると思う。貸出冊数の制限はしないことを希望する。制限するとしたら、30 冊程度にしていきたい。地域資料などは制限しないでほしい。

(3) その他（自由意見）

利用者： 『絶歌』新刊を新刊の時にリクエストして数年経つが、いまだに待っている。自分で買えば良いのだが、図書館で貸し出すということに意義があると思うので順番を待っている。
貸出不可にした方がよいという意見もあるが、私は図書館が貸し出した方がよいと思う。

利用者： 地方自治関係の新しい本が少ない。新刊はリクエストで買ってもらえるが、刊行が半年以上前のものは協力貸出（借用）になってしまう。できれば協力貸出（借用）ではなく、購入して多摩市の蔵書にしてほしい。新刊が入荷した際には、利用者の目をひくようになんらかの手段で案内してほしい。

図書館： 協力貸出（借用）については、時間的に早くなるので借用で対応をするということもある。たしかに、本来図書館にあるべきなのに買いもれている資料があるかもしれない。

いので気を付けなければならない点と考えている。

利用者： 利用者懇談会のような機会は重要。会に来ることが出来ない人のためにご意見箱など、利用者・地域住民の意見を吸い上げるしくみを作してほしい。

図書館： やんばとボックス（ご意見箱）を全館に設置している。

利用者： 新しくないと用をなさない旅行ガイドなどは、新しいものを入れてほしい。

図書館： 発行後 5 年以内の旅行書の所蔵率は、多摩市の地域館では 25%、浦安や調布市の分館では 50%。例えば多摩市の場合、東寺方図書館で借りた本を永山で返すことができるので、新刊が地域館からなくなることもあり、手に入る度合いも低くなっている可能性がある。新刊の買い方、固定の仕方も考えなくてはならない点である。

利用者： 希少価値のある本は廃棄、リサイクルしないで大事にしてほしい。手に入らない本をきちんと保存してほしい。

利用者： 行方不明になっている本はないのか。関戸図書館や永山図書館には盗難防止用のゲートが設置されているが、そのような機器を全館につける予定はないのか。

図書館： 関戸、永山図書館は駅前にある図書館だが、盗難防止システムを導入した当時は、相互利用も今のように行っておらず、本が無断で持ち出されてしまうことを防ぐために設置したものである。

利用者： 図書館に、地域の人のミニコミ誌、サークル資料、自治会の資料などを置き、ここにすれば、その地域のことがわかるというコーナーを作してほしい。それが地域図書館の使命だと思う。そういうものをアピールすれば来館も増えると思う。歴史が土台となり、未来が作られる。住民の動きを共有し、交流、生活していこうという活動をしている。資料やアンケートなど市がまとめたものは図書館に残っているが、住民側で行ったものは残っていない。そういうものを図書館が資料として保存し、提供することが大切だと思う。

図書館： 地域のミニコミもパンフレット資料として収集している。資料情報として提供していただくのはありがたい。市民活動に関わる広報類を図書館で一般公開することについては、個人情報等の問題もあり、図書館が選んで受け入れる。

利用者： 図書館の職員が、どういう役割をしてくれるのかわからない。一緒に目的の本を探し

てくれると聞いた。本について迷っているとき「図書館員になんでも相談してください」ということが周知されていればいいが、図書館を使い始めた人にはそれがわからないのではないか。どうPRしたらよいのか、検討するべきだ。

利用者： 若いお母さんの中には、希望する本が書架にないとその場であきらめる方もいる。「カウンターの職員に聞けばいい」と教えたらびっくりされた。職員が忙しそうだから声をかけては悪いと思うのではないか。職員にはなんでも聞いていいということをアピールするべきだ。

利用者： 東寺方図書館について。月に一度くらい、遠くから子どもをつれて来る方がいる。この図書館は家庭的で温かく、大きい図書館にはない雰囲気が好きとのこと。

利用者： 「多摩市内の図書館にある本は予約し、取り寄せができる」ということを知らない市民もいる。このすばらしいシステムをもっとアピールすべきである。

(閉会)